



Title	小栗風葉の作家的出発：「水の流」について
Author(s)	岡, 保生
Citation	語文. 1954, 12, p. 25-30
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68456">https://hdl.handle.net/11094/68456</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 小栗風葉の作家的出発 ——「水の流」について——

岡保生

小栗風葉の処女作は、明治二二四年七・八月「千紫万紅」の第二三号に連載された「水の流」である。それ以前に「生徒」「少年園」等へ記事文を投稿したことがあつたといふが、「小説らしいものを作つて見たのは『水の流』『色是魔』等が抑もの始まりだ」と風葉自身で明言してゐる(「予が文章上の経歴」)。ところでこの「水の流」については片岡良一氏の「処女作時代の小栗風葉」(「近代日本作家と作品」所収)において考究されており、其後発表された風葉関係の諸論文は大体同氏の論述せられたところにもとづいてゐるやうである。

もとより片岡氏の意図されたのは「水の流」から「龜甲鶴」(明二九)前後にいたる、文壇登場までの風葉作風の考察にあつて、特に「水の流」についてのみ検討されたわけではないが、従来殆ど未開拓のまま放置されてゐたかの観があつたこの時期の作物を氏がはじめて取上げて考察され、この作に關しても重要な提言を呈出されたため、その影響は大きく、最近の論文中には、あまりにも一方的な行きすぎであると見られるものさへあるのである。そこで、もう一度白紙に返し、この作を検討して、風葉の処女作としての意義

を明らかにしたいといふのが、本稿の目的である。  
が、そのまゝに片岡氏の前掲論文中、「水の流」について述べられた部分を左に要約しておこう。氏は先づ「新潮」第六卷第五号の「処女作物語」における風葉自身の回顧談を引用され、その中で特に「其時分は甚く露伴氏の作品を愛読して居たので、自然文章が露伴氏を学んで居る」といふ一節に注意し原作の一部分を示された後、この作について「特に注意されるべきこと」として  
1、風葉がまづ露伴に私淑するところから作家としての出発をしたこと、  
2、それによつて作られた「露伴張りの作品」を紅葉系の雑誌(「千紫万紅」)に投稿してゐる「田舎者らしい素朴な勇敢さ」の二項を指摘され、次いで3、風葉が作家として出発の当初から自身の主張や立場を敢て有たうとするのでなく、他からの借物によつてまづ身を装はうとした人であった」と説かれた。この3は全く氏の説かれるとほりでここに賛する必要もあるまい。1、2は連関してをり、その比重は1に傾いてゐると思ふが、仮に1が事実であつたとしても、その結果直ぐに「露伴張りの作品」となつてあらはれ

るかどうか疑問がある。これを逆に、「水の流」を一読して、直ちに「露伴張りの作品」と断じられるかどうか、私は大いに疑問をもつものである。然るに氏のかうした論説は其後たとへば

——明治文壇で紅葉につぐ名文家と言はれた彼の出来は実は露

伴の影響を受けたのであつた。(高津和子氏「小栗風葉」昭二

六)——その(風葉)文学出発期に露伴にひかれた気持は、ど  
こかに本質的に残つてゐてその作風に割りきれないものがあつ  
た。(福田清人氏「硯友社とその周囲」昭二七)  
といふやうに、水の流を中心として風葉の初期作風を露伴の影響な  
いしは模倣といふ一色で塗りつぶさうとするかの如き傾向にまで押  
し進められた。これは、冒頭に一言したやうに、行きすぎではなか  
らうか、以下「水の流」の検討を試みよう。

最初に便宜上この作の筋を記しておくことにする。(片岡氏の論

文にも全然述べられてゐない)——一人称の「我」を主人公に  
した体裁で、ある夏のこと、毎朝上野不忍池を散歩するならはで  
あつた主人公が、ある日一人の美人に会つた。心惹かれ翌日心あ  
てにして出かけてみると、女の姿は見えず、その女のらしい釵を拾  
つた。その翌日には一昨日の女に会ふことができ、我が笑顔に答へ  
て自慢の挨拶をして去つて行つた。その姿に見とれてつい釵を渡す  
のを忘れたので、さらにその翌日行くと、女は弁天堂に祈願をこめ  
てゐたので、そこで釵を渡し始めて話をする。その時の有様がいか  
にも心ありげで、主人公は「若しや我に……」と思つたりする。が、  
その翌日は時刻が遅すぎたせむか、帰途につく女の後影がおぼろに  
見えただけで、その後は再び相見る機会を失つてしまつた。  
ところがその翌年の春、上野の花見を終へて飛鳥山へ廻らうとす

る途中、広小路で既に結婚したものと見え若い男と合乗してゐるか  
の美人をちらと見かけたのであつた。さらにその秋、谷中天王寺の  
墓地に詣でて、真新しい墓の前に嗚咽しながら合掌してゐる若い女の  
目が止つたが、それこそ例の女であつた。女の立去つたあとでその  
墓に近づいて見ると俗名成瀬利作享年二十四才と誌されてゐた。——  
「水の流」は大体かういふ作品である。

一人称の「我」を主人公としてある点が、この時代としては、一  
見目新しくも感じられようが、実は決してさうでなく、かういふ形  
式は、たとへば幸田露伴の「対體譲」(明二三)とか、近くは石橋  
思案の「わが恋」(明一四)等すでに試みられてゐたし、特に思案  
の「わが恋」は、最後の一章だけを除外すれば、筋そのものまで殆  
ど本作と同様であるといつてよい。もつともこれは偶然の暗合では  
あつたが。

なほこの作が所謂私小説でないことはいふまでもないが、その当  
時——明治二十四年頃——風葉は「本郷の下宿にごろごろ」してゐ  
た時期かと推測されるので(中村武羅夫編「小栗風葉年譜」明治大  
正文学全集第十七巻)、ただし同年譜では明治二十五年となつてゐ  
る)、あるひはそのころ上野不忍池のあたりを散歩することもあつ  
たらう。

さて、この作の中心となつてをり、量的にも全体の $\frac{2}{3}$ を占め  
てゐるのは、夏の朝、主人公が美人と出会ふ件で、その後はいはば  
後日談である。ところで、かうした毎朝特定の場所である美人に出  
会ひ、その名も素姓も一切わからぬままにその洩らす微笑にひきつ  
けられて恋心のやうなものをおぼえるが、結局それは実らず女は他  
の男と結婚してしまふといふ過程は、われわれにおのづと尾崎紅葉

の「拈華微笑」(明二二)を聯想させる。

紅葉の「拈華微笑」については、私はさきに本誌第五輯に「紅葉の方法」と題して小考を發表したので、ここでは詳述を省くが、構想上からみて、「水の流」「拈華微笑」の二作は共通するものがあり、後者が前者よりも一年早く發表されてゐるから、私には風葉が「拈華微笑」にならつてこの作を書いたやうに思はれるのである。もちろんそれはこの作が「拈華微笑」そのままの模倣だといふことではない。細かい点で相違が多いし、特に女の扱ひ方が異つてゐるのが目立つ。両作品とも構想の關係上、女の気持ははつきりと描かれてゐないが、「拈華微笑」では最後に主人公の同僚の口を通して、女も主人公を思つてゐたのだといふ種明しをしてゐる。ところが「水の流」では、さきに二人の橋渡しをつとめた釣が再び利いてきて、女は全然無関心だったので、男の空想でしかなかつたのだと讀者に暗示させて終つてゐる。

釣といへば、この作における巧みな技巧を示してをり、數へ年十七才の少年作家の処女作としては器用すぎるべらうであらう。「拈華微笑」とこの作とでは、かういふ手の込んだ、悪くいへば小手先の技巧を弄してゐるとでもいはれるべき点に、相当のへだたりが見られるけれども、やはり「拈華微笑」に学ぶところは多かつたのではないかと思ふ。文章の上で示せば、

車の上の人に顔見合せ、あはやと思ふ間に早後影遠くなりぬ、  
あゝ車上の人！（水の流）

此雨に母衣もかけず。不思議と見れば、その車夫！ 其人！

車の上なは。（拈華微笑）

におけるその調子（！の使用法も含めて）を見ても明らかであら

う。用語用字等の面では「足頭」（「水の流」）「手頭」（「拈華微笑」）「目授」（「水の流」）「目授」（「恋のぬけがら」）「伽羅枕」、「拈華微笑」では「目づかひ」としてゐる等があり、「美形」（「水の流」）は露伴も用ひてゐるが、むしろ紅葉はじめ硯友社同人の頻用語といふべく、「拈華微笑」には見られないが、早く「風流京人形」から「裸美人」「夏瘦」「恋のぬけがら」等々にしばしば散見して居る。

かうしてこの「水の流」が「拈華微笑」を中心とする紅葉諸作品からかなり多くを學んでゐるのではないかと考へられるが、さきに片岡氏の引用された風葉自身の回顧談ではただ露伴に傾倒した事實を語るのみであり、紅葉については何ら述べるところがない。この点は問題なのであるが、他の文献によると、かれが紅葉のものを愛読してゐたことは明らかである。

たとへば、創作ではあるが、自ら「人名などを違へたゞけで、大抵は事実である」と註してゐる「ぐうたら女」（明四一）によると、上京後なほ日の浅いころ（註、明治二十三年春）かれは「古本屋を漁つて居た」といひ、「予が文章上の経歴」（明四一）では、「その頃には、僕には紅葉先生の『色懲悔』などは未だ能く解らなかつたが、その中に先生の『巴波川』『伽羅物語』等の純西鶴張に行つて雅俗折衷体の小説が出る。幸田露伴氏の『一口剣』が出る。僕は初めて元禄文の面白いのを読ませられて、すつかり隨喜渴仰して了つた。」と回顧し、さうして「出郷放浪、出世作」（同）においては、「一體、私が高等学校の入学試験に落第して、本郷の下宿にゐた頃、先生は読売新聞へ『むぎ玉子』といふ小説を出して居られた。それを読むと私は遽に紅葉崇拜となつて、突然、弟子にして下さいと云送

ると、兎も角も遊びに来いとの返事。けれども十六七才の私は訪問する勇気がなかつた。紅葉先生は、硯友社の外に成春社と云ふのを作つて、「千紫万紅」といふ雑誌を出して、世間から授書を募つてゐたが、私もその会員となつて『水の流』といふ短篇を載せて貰つた。」と回想してゐるのである。参考のために附記すれば、紅葉の「巴波川」は明治二十三年十二月「新著百種」に、「伽羅物語」は二十四年一月「読売新聞」にそれぞれ発表されており、「むき玉子」は同二十四年一月から三月までおなじ「読売」紙上に連載されている。以上引用した風葉自身の回想文によつて、當時「水の流」執筆前後一の風葉が紅葉作品を愛読してゐたことが分明し、従つてこの作に紅葉の影響が見出されるのも、決してふしきではないといふ。

そこで次ぎに「拈華微笑」以外の紅葉諸作中、「水の流」に特に

影響を与へて居るかと思はれる一、二の作を記しておきたい。

その一つは紅葉が青少納言の署名で、「文庫」第十九号に掲載した「犬枕」である(明治二二年四月)。これは「口惜しきものは」と見出しがつけてあることからも推察されるやうに、のちの「猿枕」(明二三)と共に、紅葉が当時愛読してゐた清少納言の枕草子をもちつたコントである。短篇集「初時雨」(明二二)に収められてゐる。

福田清人氏「硯友社の文学運動」に解説があるから(一〇九頁)、ここではくはしくふれないが、「水の流」後半における、主人公が翌年の春上野広小路で合乗車の女と会ふところ、そしてそのすでに結婚してゐる事実を知つて感慨に耽るあたりは、「犬枕」にならつたのではないかと思はれるふしがある。すなはち「犬枕」もやはり春、花見客で雜沓する上野広小路で、丸髷に結つたかつての幼

馴染の女一同じく僅に乗つてゐるところの一に出会ふのであり、その際の主人公の感概を

今見ればあの丸髷——あつぱれ高等な奥様。見違へるほど立あがつて慄然が見ゆれど。たゞかはらぬは可愛らしき目元。いかなる人の北の方とはなりたるぞ……一言ぐらゐは声かけてくれても。罰は當るまいに……アそれもならぬか今では他人の餌鳥。餌もそれからの扶持なれば。わが為には啼くまじ。

と記してあるが、「水の流」における

されどちらりと見れば若き男と合乗して髪は丸髷、今は何處へ嫁きたるにや、去年の夏! あゝ忘れられぬ去年の夏、あの頃は女も島田鶴の嫋嫋なる娘なりしに、今は主ある人、他所の籬の花、何故あの時まだ野咲の頃、手折らざりしか種敷へざりしか、噫!

の感慨は、辞句の異同はあるものの、全体の調子があまりにもよく似てゐる。なほ「水の流」発表の翌年、すなわち明治二十五年十月の起稿といふ「葉桜草紙」(後「半元服」と改題)中には「餌を食む禽は、飼主の所望次第に鳴く世の定義の……」といふ一節も見出され、かたがた本作における「犬枕」の投影は動かしがたいやうに思ふ。

その二は紅葉がはじめ前半を「百花園」に発表し、のちまとめて單行した「南無阿彌陀仏」(明二三)である。その冒頭、主人公お梅の眠る大阪蓮香寺の墓地で作者がしみじみ人生の無常を感じるところは、「水の流」の結末、主人公が谷中天王寺の墓地で深い感概を嘆はす一節として転用されたやうに考へられる。次ぎに引用する二文について見られたい。

只わづかに憂を俱にする線香の、見る間に、一片の烟、半点の灰となれば、風に誘はれて、影さへ形さへ空。これを見ば、夕電朝露とさも無常にいひなせる人の命も、まだ／＼頼もしく思はる。あゝ！老少不定斯の如きを、我人ともに春雨の日は、一日を一年と暮し、寐覚の秋の夜は、半時を三歳に明し、このまゝでゆかば五十年は生倦する事と、日頃思ひし不覚、翌日が日をも知れぬ命。心細くなりて自ら無常を感じ、身近の卵塔にもたれ、余所目には眠れるやうに立尽す……（南無阿彌陀仏）見わたす限りの墓石を見ては、転朝露夕電入世の無常を感じ、白骨文を口吟みて現世果敢なく、刹那の五十年思へば夏の夜の夢の間や、それも五十年は確と保証のものなればまだしも、無常は婆娑の定理、今日一日の命やら、朝待たぬ寿命やら、夜半の嵐は吹かぬものかは、思へば現世は仮の住所なれや只仮の、あゝ！此下に眠れる人や幾人、卯塔にもたれて瞑目觀念色々に哀れなる悲しき想像に心を取られぬ……（水の流）※

※なほこの部分は、すでに片岡民も引用されるが、それには些少の誤記（誤植？）がある。

さて、ここにみられる人生無常の諦念について片岡氏は、風葉が「まだ若いときへ云ふにも足りない程の…若さであるながら」かうしたことに感興を覚えてゐることの「奇妙さ」を見出されなかつたが、論述を急がれたためそれを指摘されたのみであつた。ここで私は「南無阿彌陀仏」と切離して、この問題を考へてみようと思ふ。

風葉自らも「世の中へ出したものでは、文芸俱楽部の『寝白粉』新小説の『龜甲鶴』等が初陣で」（「予が文章上の経歴」といつてゐるし、文学史的にもこの二作（特に後者）を以てかれの文壇登場

期を劃するものとするのは、ほぼ定つてゐるといつてよいが、それまでのかれのいはば修業時代の作を読んで行くと、意外に根深く何度もくりかへして、この人生無常—死への詠嘆や、変転はして設き人間の運命に対する諦悟といふやうなものを作品の主題として設定してゐることに気がつくのである。「都の風」（明二七）のやうに戯作的な笑ひを盛つた明るい色調の作でも、その一面に移り行く人生の相をとらへてゐるし、浪六ぱりの擬聲小説「名物男」「放駒」（明二五の改題）でも興味本位の趣向をこらしてはゐるが、宿命的な人生觀が全篇を包んでゐる。前記「葉桜草紙」や、「未の露」（明二七「未完」「臘々」）（「籠まくら」明二九所収）等は全くかうした主題に統一されたものといてよい。

そこで少くともこの期風葉における「人生無常の想念」といふものは、輕々に看過することはできないのである。「水の流」においてそれがいかに稚拙な、また底の浅いものであつたにしても、このやうな後続現象が見られるのであるから。

風葉は早熟な少年だった。十三才頃には馬琴、京伝、三馬、一九から人情本を耽読し、やがて「少年園」等に投稿を始めてゐる。しかし少年風葉に最も深い感動を与へたのは、明治二十二年一月「都の花」第六号に出た嵯峨の屋おむろの「初恋」であつた。それはこの作が「丁度自分と同じくらゐの少年」を主人公にしてゐたためで、当時読んだものの中で「一番私の心を動かした」と回想し（ぐうたら女）。それにつづけて「殊に主人公の自叙体に書いてある所から、私は作者の実歴だとばかり思つて居た。」（傍点引用者）と記してゐることはいちおう注意しておぐべきであらう。かれの「水の流」における一人称説話体という形式は、溯源するとおそらくこの

辺に胚胎してゐるのではないか。

「初恋」は年上の娘に対する少年の淡い初恋を甘美に描いた浪漫的短篇であるが、作全体を人生無常觀で包み、しみじみとした哀感が濃く漂つて居る。この悲哀感が、少年風葉の感傷をそぞり、深い感銘を与へたのであらう。折しもかれは小学校の卒業を目前にひかへ、自分では「何でも東京へ出て、中学から高等中学、而して大学へ入つて文学士になる意りであつた」が、両親は家業の薬局を繼がせようといふので丁稚奉公をさせるか、それとも名古屋の商業学校へやらうかと考へてゐて、幼時から最も両親に愛されてゐたかれも始めてままならぬ人生を味はつたのである。（「ぐうたら女」）による。なほ風葉の父が継父であつたとも伝へられてゐるが、誤のやうである。結局は両親が折れて、風葉は翌年の春宿望の上京をするのであるが、卒業後なほ故郷半田にとどまつてゐた當時、繰返し「初恋」を愛読したことであらう。その結果、やがてその年頃としては「奇妙」な人生無常觀にひきつけられて行くこととなつたのであらう。その当時、嵯峨の屋は鳥尾得菴、福田行誠、川北浩川、荻野袖園等の感化、就中得菴の人格を通じての感化により仏教に沈潜し、「人生は栄枯盛衰定めなし、諸行無常是生滅法」と観じてゐた（長谷川「葉亭君のこと」）ところから、それがたまたま「初恋」で主人公たる老翁の感慨としてあらはれたのであつた。「水の流」といふ標題、そしてそれにふさはしいこの作を濃く色どる人生無常觀は、まさしくこの「初恋」をはじめとするこのころの嵯峨の屋の文学から影響を蒙つてゐると見るべきであらう。前記「水の流」の引用文中、たとへば「朝靄夕靄」とか「夏の夜の夢の間」といふ辞句は、「初恋」の中にも見出され、上述の推測を裏づけてゐよう。

以上私は「水の流」に即して考察を進め、この作が露伴の影響を受けてゐるといふよりも、むしろ紅葉や嵯峨の屋により多くを学んで居るといふ結論を導き出したのであるが、最後に附記すれば露伴から何らの影響も受けてゐないといふものではない。片岡氏が引用された「文章が露伴を学んで居る」（傍点筆者）といふ風葉自身のことばは、私には「露伴氏をも」とあるべきだと思はれるが、文章上から露伴の影響を読みとることは可能であるのみならず、端的に露伴の「一刹那」（明二二）そのままの一節さへ見出されるのである。

要するに「水の流」一篇は、さまざまの先行品から多大の影響を受けてゐる。否むしろ率直にいへば、それら諸作を小器用に縫合はせ、まとめ上げた作であると断じてもよいかもしれない。処女作にはすべてがあるといはれるが、後年の風葉を思ふと、処女作「水の流」はかれの文学の限界を暗示してゐると考へられ、殊に深い興味をおぼえるのである。

（昭和二九、三五）

—— 東京・明星学苑教官 ——